

## イランでの米軍パイロット救出劇（645号）

2026年 4月 石館

2026年4月3日（あまり関係ないが小生の86歳の誕生日）イラン西部上空で米空軍 F-15E が撃墜され、乗員2名が敵地のイラン国内に取り残された。米軍は“誰も置き去りにしない”という方針のもと、救出のために航空機を延べ100機超、別の報道では155機規模まで投入した。



F-15E 戦闘機

小生はこの救出劇に興味を持ちどのようにこの危険な救出劇に取り組んだのか、全く受け売りに過ぎないが調べてみた。

敵防空網をかいくぐるため、戦闘機や電子戦機、空中給油機などを総動員し、地上部隊も連携する大規模な作戦となった。専用の救難・戦闘捜索救援部隊（CSAR）と、パイロットが携行する救難用通信機などが連携し、最終的にパイロットと乗員の2名は無事救出されたと報じられた。このパイロット救出劇が大きく報じられるのはいくつか理由がある。

\*パイロット救出のためだけに数十～百機単位の航空機を投入するほど、兵士の命を優先している。

\*その裏で、敵地の防空網を分析し、電子戦や空中給油など多くの高度な技術が総動員されている。

\*成功すれば軍内部だけでなく、国民に対しても象徴的な“物語”になりやすい。

トランプはこの危険な救出劇を決断したのは自分であり、大成功だったと誇っているが、軍は決して兵士を見捨てないとの信条のなかで大統領の決断がなくても軍は救出作戦をやったと思われる。

### 救出の手順の大まかな流れ

1) 被弾から脱出まで

\* 戦闘機がミサイルなどで被弾

\* パイロットが射出座席で脱出し、地上に降下

\* 降下中から飛行無線機や暗号化通信機で救難信号を発信

\* 敵部隊に見つからないように、着地位置からすぐに隠蔽地点に移動

## 2) 位置特定と安全確認

\* 偵察機やドローン、衛星画像などで周辺に敵部隊がないか確認

## 3) 救出部隊と護衛の編成

\* 救出担当のヘリや輸送機を中心とした“救出パッケージ”を編成

## 4) 着陸またはホバリングして救出

\* 救出ヘリや短距離離着陸機がパイロットの近くに接近、状況が許せば着陸して収容

### パイロット側のサバイバル行動

救出作戦の成功には、地上に取り残されたパイロット自身の行動も非常に重要である。

\* 目立たない場所に隠れ、移動は夜間中心に行う。

\* 救難無線は“出しっぱなし”ではなく、指示された時間帯だけ発信して位置特定を助ける

\* 万一捕まりそうな場合に備えて、書



類や機材の破棄方法を訓練する

\* 友軍機からの合図や暗号に従って、救出地点に時間通り到着することが求められる

この実際の救出劇の作戦は、どのルートを通ったのか、どの部隊が参加したのか、何機撃墜されたのか、といった具体的な詳細は、多くが機密として伏せられる。そのためニュースで報じられるのは“敵地に取り残されたパイロットを、多数の航空機を投入して救出した”という大枠にとどまり、詳細な手順まで出てこないことがほとんどである。しかしその後救出の概要が明らかになった。

F-15E が撃墜され搭乗していた乗員の一人は同日中に米軍によって救出されたが、もう一人は行方不明になっていた。この米兵は当初、山の裂け目に身を隠し、居場所は米側にもイラン側にも把握されていなかった。その後24時間にわたりイラン側の追跡をかわし続け、一時は標高およそ2100メートルの

山の尾根を上った。米軍と暗号化して通信できる機器を所持し、位置情報を知らせる装置は所持していた。しかしイラン側に探知される恐れを考慮し、使用の頻度を制限した。

米 CIA はイラン側を混乱させるために、米兵は既に救出され、陸路から移動するとの偽装作戦も実行した。イラン側が混乱している間に CIA はその卓越した能力を駆使して、この米兵を捜索し、発見した。山の裂け目に閉じ込められた勇敢な米国人の魂と、CIA の能力がなければ発見できなかったであろう。

CIA が居場所を特定すると、軍はすぐに救出作戦にとりかかった。米軍機が現



HC-130J Combat King II Takeoff and Flybys - You Tube

地に到着すると、空から爆撃してイラン軍を遠ざけた。

#### HC130J 輸送機

兵士の救出はヘリコプターだったと思うが、作戦に参加した輸送機2機が着陸した際問題が発生、離陸することが出来なくなり、イラ

ン側の手に渡ることを防ぐため、自ら破壊した。

トランプ氏は”米国史上最も大胆な救出作戦“と称した。米兵がイラン側に捕えられ、人質として交渉材料に利用されれば、苦境に追い込まれる可能性があった。

航空機の損失そのものよりも、その後に待っている一連の行動こそが、軍事組織の本質と価値観を最も雄弁に露呈させる。アメリカが選択したのは、躊躇なき大規模な戦闘搜索救難（CSAR）の発動であった。

投入された航空戦力は100機を超え、戦闘機、電子戦機、空中給油機、無人機、救難機など、ありとあらゆる航空機が用いられた。

戦闘搜索救難（CSAR）は、人命救助にとどまらない。それは国家と兵士の間に結ばれた”契約の実践“である。”生存者がいる限り決して見捨てない“という理念はしばしば美辞麗句として語られるが、本作戦においては具体的な行動原理は確実に機能した。

結果として2名の搭乗員は無事に救出されたが、しかしその代償は決して軽微ではなかったようだ。輸送・救難任務に従事した HC-130J が2機、さらに軽攻撃ヘリコプターが失われたとされる。これらの輸送機やヘリコプターは軍事機密を守るため遠隔操作で爆破されたらしい。人的被害はなかったが、装

備価値の比較においては撃墜された F-15E、その一機を上回る価格だった。



撃墜された F-15E の残骸

不明兵搜索、時間との戦い イラン  
の猛攻耐えた米軍救出作戦 ...

然しこの作戦はアメリカ空軍にとって紛れもなく“成功”と評価されるであろう。なぜなら彼らにとって最も重要なのは装備ではなく“人”だからである。とりわけ航空機搭乗員は高度な訓練が必要であ

り、長年にわたる投資の結果生み出される“人財”であり容易に代替しえない存在であるのだ。

また何より、“必ず救出される”という確信は、前線に立つ兵士の心理的基盤を形成し、その戦闘意志を根底から支えている。